
BLEACH ～シンデレラ～

MY 0 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH ～シンデレラ～

【Nコード】

N0821K

【作者名】

MY02

【あらすじ】

BLEACHの仲間たちが繰り広げる、オリジナルシンデレラストーリー。

BLEACH（前書き）

）登場人物（

BLEACH

・シンデレラ 井上 織姫

性格はおっとり、おだやか、常に笑顔
を振りまく明るい性格。

・王子 黒崎 一護

怖い外見だが、困っている人を見ると
ほおっておけない心やさしい性格。

・魔法使い 浦原 喜助

怪しい部分が多く、いつもひょうひょうと
した態度、その真意はつかみづらい。

・お姉さん 朽木 ルキア

古風な口調と高飛車な少女。

松本 乱菊

大人の色香漂う妖艶美女、その性格は豪放磊落。

・お母さん 卯ノ花 烈

言動は周囲に安らぎと癒しを与える
常に冷静沈着。

・ねずみ 有沢 たつき

面倒見がよく、曲がったことが嫌い。

浅野 啓吾

お茶目な性格。

本匠 千鶴

シンデレラにアタックを繰り返すが、その

たびにたつきにしめられる。

・ニセ王子 コン

明るくスケベで巨乳好き。

・王様 黒崎 一心

極めて明るい性格で、うざいほど、
ハイテンション。

・女王様 黒崎 真咲

きれいな人でいつも笑みを浮かべ、感情
おだやか。

・けらい 石田 雨竜

頭脳優秀、王子と仲がいい？

・ぎよしゃ 茶渡 泰虎

大男、こわもての外見、気が優しくてかわ
いいものに目がない、王子と仲がいい。

・他

BLEACH（後書き）

こんな感じですが、よろしくお願いします。

3人の娘

空は青く澄んでいた。

お城は太陽の光に照らされていた。

お城の近くにある町は、いつも以上にぎわっていた。

お城から、若い娘に「舞踏会の招待状」が届いたからである。

それを知らない3人の娘たちは、いつものように買い物をしていた。

「いつも以上ににぎわっちゃってどうしたのかしら？」

と長女の松本乱菊。

「確かにそうですね」

荷物を持った次女の朽木ルキアが言った。

そんな2人の後ろから、大荷物を持った、三女の井上織姫シンデレラが急ぎ足で歩いていた。

「待って……二人とも……！」

「もう、早くしなさいよ……」

「そんなこと言われてもおお……乱菊さんも持ってくださいよ
おお……」

「そんなに急いでいたら、転ぶ……」

とルキアが言った直後に織姫は転んでしまった。

「……い、井上大丈夫か？」

織姫はおでこに大きな擦り傷を付けながら、

「う・うん、大丈夫！ ははは・・・」

と見る限り大丈夫じゃなさそうに言った。

みんなが注目している中、

「だ、大丈夫？ 織姫！」

乱菊も心配そうに声をかけた。

織姫は落ちた荷物を拾って、2人のところに行った。

「じゃ、買い物も終わったしかえるわよ」

「そうですね、お腹も空いたしかえりましょう」

「お母様も待っているしな」

と3人は、お腹を空かせて家に帰った。

3人の娘（後書き）

ところどころ、変なところもありますが、
優しく見守ってください！！

招待状

「ただいま」

と乱菊が、ドアを開き元気よくお腹をすかせて帰ってきた。
ルキアも井上も同じようだった。

「お帰りなさい」

と卯ノ花烈（お母さん）が優しく迎えてくれた。

「あゝお腹すいた」

井上はすぐ椅子に座って、テーブルに顔を寄せた。

「あら、井上さんそのおでこの傷どうなされました？」

「あ、これは荷物を持っているとき、こけちゃって……。」

「ほんと織姫はドジね」

「あはははは……。」

織姫は少し落ち込んだ様子に見えた。

すると、卯ノ花は

「大荷物でしたから仕方ありませんね。後でぬり薬をぬってあげますね」

とやさしく言った。

「よかったな、井上」

「うん」

「ねー早く食べましょうよ。話してないでー もうお腹すいちゃったー」

乱菊はあきた様子で言った。

「夕食ならもう出来てますよ」

「ほんとうですか、母様!!」

「やったー!!」

と二人は目を輝かせた。

そして、出てきたのは……

（（（そ、それは……）））

「今日は、滋養強壮スープです」

そのスープは卯ノ花の特性、漢方薬スープだった。

「ほ、ほかにもあるんですか」

「今日の残りものです」

三人は少しほっとした。

そして、

「「「いったっきまーす!!」」」

3人は元気よく食べ始めた。

すると、乱菊が

「そういえば、町のほうにぎわってたけどお母さん何か知ってる？」

「そうですね、もしかしてこれのことですか？
と卯ノ花が何かを取り出した。」

「何ですかそれ？」

井上が尋ねると、それは・・・

手紙だった。

「手紙？」

「誰からですか？」

「お城からです」

「「「お城から――！！！！」」」

招待状（後書き）

投稿が遅くなると思いますが、次も見えていただけたら嬉しいです。

招待状2

3人は一斉に驚いた。

「中身は皆さんが来たら開けようと思って開けていなかったんです」

「じゃさそっく開けてみましょう!!」
と乱菊が恐る恐る開けてみた。

するとそこには・・・

『招待状』 と書かれていた。

乱菊は目を見開いた。

「中身はなんですか？」
とルキアがいった。

「招待状・・・」

「え、・・・っ招待状!!」

「しよ、しよ、しよ、招待状ーーーー!!」
ルキアも織姫も目を見開いた。

「それで中身は・・・」

乱菊は読んだ。

「招待状

今夜、8時からお城で舞踏会を行います。

親御様 一名

娘様か息子様 二名

よろしければいらしてください

だって」

「今日行うんですか！」

ルキアはまた目を見開いた。

「だから街がにぎわっていたんだ」

織姫は手をたたき、納得したという顔で言った。

「で、3人しか行けないけどどう・・・」

「みなさん、お話中すみませんが今は食事中、夕食がさめてしまうのでお話はあとでしていただけます か？」

卯ノ花はにっこりとした、怖い顔で3人を見てい言った。

3人は凍りついた。

そして、同じことを思った。

（（鬼がいる））
と。

「どうかなさいました？」
卯ノ花が尋ねると

「え、いやなんでもないです！！ さ、早く冷めないうちに食べましょ！」

「あ、はい！！」

7時、3人は『招待状』の話をしていた。

「さっきの話の続きだけどどうする？」

「いけるのは、2人だけなんですよね」
3人は考え込む。

すると、織姫が顔を上げていった。

「あたしはいいよ。乱菊さんと朽木さんで行ってきて」

「え、でもいいのか井上？！」

「そうよ！ 織姫あんた昔から行きたいって言ってたじゃない！！」
2人は驚いた様子で織姫を見ていった。

「いいから行ってきて」

「織姫・・・」

するとそこに、卯ノ花が

「そろそろ、私宅をしますよ」
と出てきた。

「はい！じゃあ早く準備しよう」

織姫はにっこりとほほ笑み2人の準備を手伝った。

「じゃ行ってくるね、織姫」

「うん！いつてらっしゃい」

「お留守番お願いしますね」

「じゃあな井上」

「気をつけてね」

3人は迎えに来ていた馬車でお城へ行った。

謎の魔法使い

織姫は迎えに来ていた馬車に乗った3人を見送った。

「はーあ行っちゃったー・・・」

「あっ！葉ぬってもらうの忘れちゃったー」

おでこをさすりながら言っている・・・

「どうした織姫？」

と、どこからか声が聞こえた。

「ん？誰？」

下を見てみるとそこには・・・

3匹のねずみが心配そうに見上げていた。

「あー！！！ねずみさん、見てないと思ったら何所にいったの？」

「いやいやごめんごめん、実はさ、『幻のチーズ』を探しに行ってたんだ」

一番前にいる有沢たつきがいった。

「おかげでこんなに見つかったす！」

と、浅野啓吾がチーズを出そうとしたとき・・・

サーーーーっと啓吾の横を何かが走り去った。

「うわっ、何だ？」

走り去った風が啓吾を襲った。

「ヒィメィ、久しぶりィ、さびしか・・・」

「ちよいまでー！！」

と織姫のもとへ走って行った本匠千鶴のしっぽつかんだ。

「うぶっ、イッターィ、何すんだコラァ！！」

「ンあァ！？何だよ、文句ある！」

「あるにきまつてるでしょ！せっかく・・・」

「また始まったよ、2人のケンカ・・・」

2人（2匹）のケンカを見てあきれながら啓吾はボソリと言った。

そんなことをしていると・・・

グウウウウィ

と、誰かのお腹が鳴った。

「そうだ、せっかくお腹が鳴ったことだし、あたしの家で何か食べようか。外も冷えるから」

「俺、賛成ィ 疲れたし腹ペコだしさっさと食べちゃおうぜィ ほらお前ら行くぞー！！」

「「ん！？」」

ケンカをしていた、たつきと千鶴が振りむいた。

「「お前が指示するなー!!」」

2人同時に啓吾をにらみつけ、襲いかかろうとした。

「ギャアアアアー!!」

啓吾はそれをよけ、家へと猛ダッシュで走って行った。

たつきと千鶴も啓吾を追いかけて行った。

「ああ〜待って〜」

織姫も3匹の後を追いかけた。

7時過ぎ

たつきたちが旅をしてまで探した「幻のチーズ」はあつという間にみんなで平らげてしまった。

「いやー、おいしかったな〜「幻のチーズ」、旅してきたかいがあったよ!」

「うん! 本当においしかったよ〜」

織姫がチーズの味に満足していると、

「そういえばどうしたの? そのおでこのけが」
たつきが聞いた。

「あ、これはね、今日町で荷物を持っていたら転んだんだ」

「ドジだなー相変わらず」

「確かに、でも、そんなドジなヒメも好き」
千鶴は慰めようとしたのか織姫に言った。

「薬はないの？」

「たぶんあると思うけど、どこにあるか分からないんだ」

ゴトツ

台所で何か物音がした。

「ん？」

「なに？」

「なんだ？」

「なに？」

そこにいた4人（1人と3匹）が同時に言った。

「何だろう？何か物音がしたよね？」

「うん、確かにした」

「何か落ちただけじゃないか？」

「そうかな？」

みんなが口々にしゃべっていると

「啓吾あんた見てきなさいよ」

「は？」

千鶴が言った言葉を聞いて啓吾は驚いた。

「いやいやいやいや、無理だから無理、絶対無理！！」

「おくびようだなー、男だろ！？」
たつきも参戦した。

「いや、無理、だったらお前らが行けばいい・・・」

そう言った瞬間、啓吾は2人ににらまれた。

こういう時、いいえと言うのは無理に近い。もし、言ってしまったら何をされるかわからないからだ。
だから、はい。と言うしかない。

「はい・・・」

「よし、行ってこい！」

啓吾は泣きながら台所へ向かった。

けれど、その前に何かが出てきた。

「カボチャ？」

織姫が不思議そうに言った。

「カボチャだね」

「カボチャだな」

「カボチャね」

3匹は少し冷めた口調で言った。

そして、そのカボチャは宙に浮いた。

「浮いた？うワァ!？」

カボチャは急に織姫たちの前に早く飛んで行って、外に出てしまった。

「なんだ？」

「とにかく、追いかけてみよう！」

たつきの合図でみんなはカボチャを追いかけて外に出た。

外へ出てみると、そこにはカボチャの姿はなかった。

「居なくなっちゃったね」

織姫は少しがっかりした。

すると、突然音楽が鳴り始めた。

ジャンジャカ、ジャンジャカ、ジャンジャカ、ジャンジャカ

「レディーエン ジェントルメン、お待ちせいたしました。それでは始めたいと思います。」

男性の司会が終わると、白い煙が現れた。その白い煙の中には人影

が映っていた。
と、突然煙がたくさん上がった。

バアアアンン！！

そして、いきなり大きな音を立てて爆発してしまった。

「なに？」

みんなが驚いていると、煙の中から何人か人が現れた。

「いやー、失敗しちゃったっスねー」

「店長お怪我は？」

「大丈夫っス」

「しかし、すごい爆発だったなー」

「・・・・・・・・」

「お前も何か言えよ！ウルル！」

ゴンッ

「いたっ！？痛いよジン太君！」

「うるせー！お前が何もいはないからだろう！」

「まあまあ、ケンカはよしなさい」

そんな様子を見ていた織姫たちが口を開いた。

「あなた方はいったい何者ですか？」

織姫が帽子をかぶった男に尋ねた。

「アタシらですか？まあ、魔法使いと言っても言っておきましょう」

「魔法使い？」

織姫は不思議そうに聞き返した。

「はい。織姫さん、アタシたちはあなたの願いをかなえに来ました」

「あたしの願い？」

「はい。とその前に、自己紹介でもしときますかね。左から、握菱
テッサイ、花刈ジン太、紬屋ウルル
、そして、アタシが浦原喜助です」

「ちょっと待てー！勝手に話をすすめるな！」
そこに割り込んできたのは啓吾だ。

「魔法使い？そんなもん信じるか！だいたい何だその衣装はここら
にはない格好しやがって！！
どうせ人の金を盗むためにやってるだけだろう！！」
啓吾が怒りを爆発させて言う。
と、そこにたつきが入ってきた。

「ちょっとあんた一回黙っとけ！」

「なんでだよ！俺は本当のこと言っただけ・・・」

啓吾はまたにらまれてしまい

「はい・・・」

と言うしかなかった。

「確かに、こいつの言うことには一理ある。本当にあんたたちは魔法使いというやつなのか？」

「たつき・・・」

たつきも本当は同感だった。

「確かに、あなたたちから見ればアタシたちは怪しい存在かもしれない。けれど、嘘かどうかは本当に見てから言っていたきたい」

「さて、織姫さんあなたははどうしたいですか？あなたは夢をかなえてもらいたいのですか？

もちろん無理にとは言いません。あなた自身の答えを出してください」

「あたしは・・・あたしは夢をかなえてもらいたいです」

織姫は自分自身の気持ちをはっきりと言った。

「織姫さん、あなたのかなえたい夢はなんですか？」

「あたしのかなえたい夢は、ずっと行きたかったお城へ行くことです」

「はい！かしこまりました。テッサイ、ジン太、ウルル準備をお願いします」

「はい。店長」

「はい」

「ヨォォーシ！！待ちくたびれたぜ！」

浦原の指示を聞き、3人は準備をし始めた。

「まずは、ドレスに着替えましょう！」

「ドレスですか？でも、ドレスなんて持ってい・・・」

「大丈夫っス！こっちで用意してありますから。サッこの箱に入っているのでこの中に入って着替えてください」

「はい。ありがとうございます！」

織姫は用意してくれた箱に入りすぐさま着替えた。

そして、10分後

「あのー、本当にこんな素敵なドレスでいいんですか？箱のはじから顔を出して言う。」

「お気に召しませんでしたか？」

浦原は尋ねた。

「そんなことはないです。だけど、私が着てもいいんですか？」

「もちろん、あなたのために用意したものですから」

「はい。じゃあ・・・」

と、織姫は箱の外に出た。

すると、そこには今まで見たことのない美しい姿の織姫がいた。美しいドレスに包まれ、織姫は輝いていた。

「ウワァー、きれい」

その場にいたみんなが見とれていた。

すると、浦原がねずみたちほうへ歩き始めた。前まで行くと、何かをふところから差し出した。

「ん？何だこれ」

啓吾が不思議そうに見ていると、浦原が説明をし始めた。

「ねずみさんにはこれを飲んでいただきたい」
手元には、3本の瓶があった。

「これを？なんのために？」

「もちろん、織姫さんのためっス。シンデレラには馬車が必要っスからね」

3匹はわけも分からず、とにかく飲んでみた。

すると、そこに居た3匹の姿が消え、馬とぎよしゃの姿が現れた。

「なんじゃこりゃー!!」

「何で馬になってんの!？」

「なんで!？」

3匹は驚いた。

「ブフウツ！たつきの顔、クククッ!？」

「うるさいなー！あんただって同じもんだろう！」

「なんですってー！」

「何だよ！」

またたつきと千鶴のケンカが始まった。

「はいはい！次は馬車といきますか！」

手を叩きながら浦原はそこに準備してある、白い布のかぶった何かの前に立った。

みんなの注目が浦原に集中する。ケンカをしていた、たつきと千鶴も注目した。

バツツ！

白い布は浦原の手にひかれ、いきよいよく引っ張られた。

その中にはカボチャの形をした馬車が置いてあった。

「うわぁー、すごーい！」

織姫は驚いた。

「もしかして、これって、さっきのカボチャじゃないですか？」

織姫がさっきのカボチャを思い出して聞いた。

「そのカボチャはここにあるっスよ！あなたたちを外に出してもらうために使っただけっス」

「そうなんですか」

「店長、準備が整いました」
テッサイが馬（たつきと千鶴）を馬車につけ終わり、浦原に言いに来た。

「はい！それじゃっ行きますかね。とその前に、織姫さん」
馬の姿になったねずみたちを見て驚いている織姫に言った。

「これをはいてってください」
浦原が出したのは透明な靴だった。

「これは？」

「ガラスの靴っス」

「ガラスの靴？いいんですか！？そんなきれいなものをあたしが履いて」

「もちろんスよ！サッはいてください」

「はい・・・」

履いてみるとその靴は織姫の足にぴったりだった。

「ぴったり・・・」

織姫が不思議そうに見ていると、浦原が何かを取り出した。

「それと、おでこのけが、直しておきますね」

「はい、すいません。お願いします」

取り出したものは塗り薬だった。

織姫のおでこに塗り終わると、浦原はカボチャの馬車に乗せた。

「いいですか？夜の12時までに戻ってきてくださいね。じゃないと、効き目が切れてしまいます」

「はい、分かりました。本当にありがとうございました」
織姫が言うのと同時に、馬車は動き始めた。
そして、お城へ向かって行った。

「あなたにはしてほしいことがあるんです。頼みます、織姫さん」
と、浦原が不思議なことを呟いたのだった。

謎の魔法使い（後書き）

お待たせしてすみませんでしたー！！
今回は長い話になっているので楽しんで読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0821k/>

BLEACH ～シンデレラ～

2010年10月10日14時52分発行